銀の音色にのせて

sarasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀の音色にのせて

【Ｎコード】
Ｎ７２６４Ｕ

【作者名】
ｓａｒａｓａ

【あらすじ】
新しいハーモニカを買ってきたＳＬさん。練習がてらに１曲演奏するのだが……。

（前書き）

この物語は鉄道擬人化小説です。静岡県にあります「大井川鐵道」の路線を人にして物語を作っています。そう言うのが苦手な方はごめんなさい。

「あ、ＳＬさん。新しいハーモニカを買ったのですね」
大井川がにっこりと笑う。
「ああ。前のも愛着があるのだがな」
「これも、いつものお店で？」
「もちろんだ。やはりハーモニカは浜松に限る」
そういうなり、ＳＬはおもむろにハーモニカを吹き始めた。

――線路は続くよ、どこまでも。

美しい音色が、静かな山里にこだまする。
１コーラス吹き終わり、ＳＬはハーモニカから唇を離す。そのとたん、どこからかパチパチという拍手が聞こえてきた。
「……いかわ……」
「あ、いかわさん。こっちで聞きましょうよ」
反対側ホームでにこにことほほえみながら拍手していたのは、つい先ほど千頭駅に戻ってきたいかわ。大井川がおいでおいでと手招きをすると、きょろきょろとあたりを振り返った後、チョコチョコと走りよってきた。
みんなの元に駆け寄るなり、いかわはＳＬの顔をじっと見つめる。いかわの汚れのない瞳に見つめられるのが苦手なＳＬは、あえて視線をそらせると、今度は別の曲を吹いた。

――みかんの花咲く丘。

美しいメロディに、いかわの表情がうっとりとしたものに変わる。

そんないかわを見て、大井川は心が温かくなるものを感じた。
１曲吹き終わった。ぱあっと顔を高揚させると、いかわはまたもパチパチと激しく手を叩く。ついでにしっぽもパタパタと振り動かす。これにはさすがの大井川も苦笑していた。
「いかわさん、音楽好き？」
大井川が優しく訪ねると、いかわはうれしそうにこくこくと頷く。瞳をきらきらとさせて、うれしそうに二人の顔を交互に見つめるいかわを見て、大井川は優しく頭をなでた。
「……私は練習をしたいだけなのだがな……」
苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべるＳＬ。小さくため息をつくと、手の中のハーモニカをくるくると回した。
「いいじゃない。練習から聞いてもらえば。喜んでる人もいるわけだし」
「まあ、そういわれるとそうなんだが……。なんだか気恥ずかしくてな」
ＳＬは頭をポリポリとかく。
大井川は苦笑すると、やけに目をきらきらさせたままのいかわの肩をぽんと叩いた。
「いかわさん、吹いてみますか？　ハーモニカ」
そのとたん、いかわの目が真ん丸になる。大井川がポケットからハーモニカを出すと、いかわはハーモニカと大井川の顔を交互に見る。
「オレのですよ。大丈夫だから」
おそるおそるといった風にいかわはハーモニカを手に取った。いかわの両手よりも大きなハーモニカは、金属部分がかすかにすすけていた。
いかわは大井川の顔をのぞき込んだ。その瞳が「いいの？」と問いかけている。
大井川は大きく頷いた。
いかわはかすかに震えながら、ハーモニカに口づけた。

ぷうぷうと三音ほど漏れた後。
ハーモニカから、聴いたことのないメロディが流れてきた。
明るいメロディ。うきうきするリズム。
なのに、どこか哀愁漂う曲。
聞き覚えはないのに、何故か懐かしいと感じる音楽。

一曲終わり、いかわは唇をハーモニカから離した。そのとたん、音と言う音が消えたかのような静寂に包まれる。
いかわはあわてて大井川の手にハーモニカを返すと、近くの物置に隠れてしまった。
「あ、待て！」
我に返った大井川だが、タイミングは遅かった。すでにいかわは物置の陰に隠れてしまっている。ハーモニカをポケットにしまうと、ゆっくりと物置に近づいていった。
いかわは、物置の壁にぺったりとくっつき、小さくカタカタ震えていた。よほど怖いのか、大きなしっぽを抱き抱えるような姿勢で、小さく丸くなっている。
「いかわ」
大井川は呼びかけた。一瞬ぴくんと反応はあったが、丸くなった姿勢は変わらない。
大井川がそろそろと手を伸ばし、いかわの頭に手を添える。
「すごいきれいな音楽だったから、びっくりしたんだよ。オレも、ＳＬも。怖がらせちゃってごめんね」
その言葉に、ゆっくりといかわの頭が持ち上がる。上目遣いに見上げるいかわの瞳には、まだおびえの色が見られた。
「怒ってるんじゃないよ。ヒトってね、すばらしいものに出会うと、言葉がでなくなっちゃうんだ。本当だよ」
ー―ーホントウニ？
いかわは瞳でそう尋ねる。

大井川はにっこりほほえむと、ゆっくり大きくうなずいた。
いかわの瞳がきらきらと輝き出す。ぎゅっと抱きしめていたしっぽがするりと腕からこぼれ、ゆらりゆらりと揺れている。
大井川は、いかわの頭を優しく撫でた。いかわは少し恥ずかしそうに首を動かすと、ぽふっと大井川の胸に顔を埋めた。

「ところで……」
あれから半日は過ぎ、すっかり日も暮れた頃。終業作業をしていた大井川に、ＳＬは尋ねた。
「あの曲は、何という曲だったのだ？」
「あの曲？」
「昼間、いかわが吹いた曲だ」
ＳＬの言葉に、大井川は困ったような顔をする。
「あ、ああ……オレも知らないんだ……」
「そうなのか？」
「うーん……昔々、どこかで聞いたことがある気がするんだけどなあ……」
「私もそう思うのだが……」
うーんとうなる大人二人。
「……もしかして、ＳＬさんもレパートリーに加えたいとか？」
思いついたように言う大井川に、ＳＬはまじめな顔つきで答えた。
「あれはいかわのものだろう。私ではああは吹けぬ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7264u/

銀の音色にのせて

2011年7月10日03時53分発行